

「住吉広行」展によせて

住吉広行筆「和歌三神図」にみる広行の特徴

「住吉広行―江戸後期やまと絵の開拓者―」展は、住吉家五代目の広行(1755～1811)をメインとして取りあげる初めての展覧会になります。本稿では、広行の特徴がよく分かる代表作の一つとして、「和歌三神図」(図1、個人蔵、前期展示)を取りあげたいと思います。

中幅に住吉神、右幅に玉津嶋神、左幅に柿本人麿が描かれた三幅対で、いずれも和歌の守護神として崇拝されていました。中幅の住吉神は、杖と団扇を持ち、壇上に座っています。白く長い眉や髭をはやしており、威厳のある表情で表されています。右幅は玉津嶋神として衣通姫を描いています。衣通姫は「日本書紀」などに登場する和歌を得意とした美女で、玉津嶋神と同一視されていました。左幅の柿本人麿は、飛鳥時代の歌人で、歌人の中でも殊に崇拝されていました。手に紙と筆を持ち、歌を思索している姿で表されています。

三幅の画面の上部には鮮やかな色紙形が描かれており、色紙形の中に松平定信が賛を記しています。賛によると、住吉神の姿

は住吉法眼の絵に倣い、玉津嶋神と柿本人麿の姿は新令の装束の制を参考にして住吉広行が描いたもので、賛の内容は長野(源)清良が起草し、田安德川家三代斉匡に乞われて定信が享和3年(1803)に賛を執筆したといえます。賛によって、制作年や制作依頼者、制作の経緯などが分かる点が貴重です。

広行が住吉神を描く際に参考にしたという住吉法眼の絵とは、住吉家の遠祖とされる鎌倉時代の伝説的な絵師・住吉法眼慶恩の絵と考えられます。住吉家で編纂された「本朝画事」という資料には、慶恩の作品として「住吉神影 松鷲 二幅」と記されています。住吉神と松と鷲が描かれている絵のようで、この慶恩作品を参考にしたために、本作品の住吉神の後ろに、松と鷲が描かれていることが分かります。

広行が玉津嶋神と柿本人麿を描く際に参考にしたという新令の装束の制とは、養老律令の衣服令であろうことを鎌田純子氏が指摘されています(鎌田純子「口頭発表」松平定信賛・住吉広行筆「和歌三神図」に

ついて―国学興隆が及ぼした絵画製作への影響―」第59回美術史学会全国大会、2006年)。令は遺存していませんが、養老令の注釈書「令義解」よりの内容を知ることができます。「令義解」の伝える養老律令の衣服令には、結った髻を金玉で飾る「宝髻」が内親王や女王の礼装として記されています。本作品の衣通姫(玉津嶋神)を見ると、たしかに、頭上に結んだ髻に豪華な髪飾りを付けています。衣通姫は江戸時代に多く絵画化されていますが、そのほとんどは、垂髪(結わずに長く垂らした髪)、十二単姿で描かれています。垂髪、十二単は平安時代中期(10世紀)頃に定着したのですが、衣通姫は平安時代よりずっと前、5世紀半ば頃に允恭天皇に寵愛されたという伝承をもつ女性です。養老律令は718年に撰定されており、5世紀とはいきませんが、平安時代より前の時代の法典です。広行は通例より古い時代の女性の姿として衣通姫を描くために養老律令を参考に研究して、垂髪ではなく宝髻としたのだと考えられます。衣服も、衣を何枚も重ねる十二単ではなく、シンプルな重ねの古風なものとしています。

柿本人麿もまた、江戸時代に数多く描かれた人麿図とは異なっています。通例の人麿図は、住吉家四代目の広守の描く「柿本人麿図」(図2、個人蔵)のように、菱烏帽子・直衣姿で描かれ、直衣の袍(上着)は、白色か水色で表されることが多いです。一方で本作品の人麿は、冠を被り、緑色の袍を着ています。この装束は、当時の人麿研究を反映したものだと考えられます。国学者の賀茂真淵(1697～1769)などの活躍によっ

て、18世紀半ば頃より人麿に関する実証的研究が深まっていました。真淵は様々な文献資料を調査した上で、人麿の位について六位以下であると考証しています(『万葉考』別記二)。こうした研究を参考にして人麿の位は六位か七位あたりと考え、人麿の生きた時代(7世紀後半～8世紀初頭頃)に近い養老律令の衣服令に、六位の朝服は深緑色、七位は浅緑色と記されていることに因み、本作品では緑色の袍にしたでしょう。人麿が烏帽子ではなく冠を被るのも、養老律令の衣服令に「頭巾」と呼ばれる冠を被ることが記されていることに因みます。

本作品の賛を記した松平定信の統率のもとで行われた内裏再建において、広行は故実研究を反映した賢聖障子を寛政4年(1792)に完成させ、高い評価を得たことが知られています。描くモチーフのことをよく研究し、古い絵画や書物を用いた考証を行って作品を制作することは、広行の大きな特徴としてあげることができ、本作品にもそうした特徴があらわれています。広行が一人だけで研究を行っていたのではなく、本作品の場合、賛を起草した田安家家臣の長野清良と研究を重ねたのだと考えられます。松平定信の父の田安德川家初代宗武は考証研究を熱心に行った人物で、清良は幼い頃より宗武に仕え、その薫陶を受けていました。考証研究を反映した人麿図に関しては、宗武の周辺でも制作されており、そうした情報も清良を通じて広行にもたらされたものと推察されます。18世紀後期頃より、古画や古書を用いた考証を反映させた絵画制作が盛んになりはじめており、広行はそうした新しい動向の最先端で活躍していたと言えます。

なお、本作品には、考証を反映した人麿図が描かれていましたが、東京国立博物館蔵の広行筆「和歌三神図」(後期展示)には、通例の菱烏帽子・直衣姿の人麿が描かれており、通例を好む人向けの制作も行ったことが窺えます。

本稿では、広行作品における考証に注目しましたが、豊かな彩色、細密な描き込みも広行作品の魅力としてあげられます。ぜひ展示場で実物をご覧ください。(宮崎もも)



図1 住吉広行筆 和歌三神図 個人蔵



図2 住吉広守筆 柿本人麿図 (三十六歌仙画帖のうち) 個人蔵